

令和7年度 府立桃山高等学校(全) 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>○文武両道・自主自律の校是のもと、学習と部活動の両立を図り、知・徳・体の調和のとれた創造性あふれる心豊かな人間の育成を目指す。</p> <p>○新学習指導要領の趣旨を踏まえ、SSHを本校の中核的な取組とすることで、教育活動の充実を図る。資質・能力「5C」と「桃山エージェンシー」を身に付けた、個人と社会のウェルビーイングを実現できるグローバルサイエンス人材の育成を目指す。</p> <p>○公立高校の中核校として、次代を担う人材の育成を図るとともに、府民の期待に応える学校づくりを推進する。</p> <p>*5C グローバル化とサイエンスの発展が重要となる次世代社会において、国際的に活躍し得るグローバルサイエンス人材に必要な資質・能力を、以下の5項目として、本校では育成を目指している。</p> <p>①Critical thinking and problem solving (批判的思考力と問題解決力) ②Creativity and innovation (創造力と革新力) ③Collaboration (協働力) ④Communication (コミュニケーション力) ⑤Challenge (挑戦力)</p> <p>*桃山エージェンシー 自らの能力を活かして社会に貢献しようとする意識</p>	<p>(1)「主体的学習者」の育成に向けた授業改善の動きが、徐々に広がっている。さらに、生徒の多様性に対応するべく、「個別最適な学び」や「協働的な学び」の要素を、授業改善の視点に組み入れることが必要である。</p> <p>(2)新しい大学入試制度に対応するために、組織的な教科指導や進路指導の実施に努めた。その結果、進路実現に向けて、学校全体で指導を行うことができた。また、国公立大学・難関大学・私立大学に、多くの生徒が積極的にチャレンジし成果をあげた。今後は、生徒の進路希望を尊重しながらも、より高みを目指して積極的にチャレンジできるような組織的な指導・支援を継続する。</p> <p>(3)SSH第4期の指定を受けることができた。</p> <p>(4)普通科・自然科学科ともに学校設定科目「グローバルサイエンス探究」の内容の充実が図られ、探究的な学びがより一層進み、その成果が、「次世代で活躍する人材」としての資質・能力の育成につながることができている。</p> <p>(5)学校説明会、各中学校での説明会、ホームページ(YouTube)等をとおして、本校の教育理念、SSH事業の取組、部活動の取組に魅力を感じた多くの中学生が、本校を志望した。今後は、ホームページだけでなく、Instagram等を活用した戦略的広報を行うことで、桃山高校の魅力をさらに発信していく必要がある。</p>	<p>(1)授業・部活動・特別活動において、生徒の「探究力」を高める活動を推進する。</p> <p>(2)「主体的学習者」の育成に向けた授業改善(「教え込む」授業から「引き出す」授業へ)をさらに推進する。また、学びにおけるICTの活用等により、生徒の多様性に目を向けた「個別最適化」や「協働的な学び」についての取組を実践する。</p> <p>(3)生徒が希望進路の実現のため、主体的・積極的に、諦めず粘り強く高みを目指すことができるように、組織的な指導・支援を行う。</p> <p>(4)SSH第4期初年度の取組に、「資質・能力5C、桃山エージェンシーを身に付けた、個人と社会のウェルビーイングを実現できるグローバルサイエンス人材の育成」という目標を落とし込み、全校体制でその取組を実践する。</p> <p>(5)学校経営方針を最上位の目標として、各分掌業務が前年踏襲にならず、業務の精選や刷新をはかることで、教職員の「働きがい」の向上を図る。</p> <p>(6)教職員自身が桃山高校生にとってのロールモデルとなることを目指し、高いコンプライアンス意識をもった教職員集団を形成できるよう努める。</p> <p>(7)YouTubeやInstagram等を活用した戦略的広報を、より一層充実させ、選ばれ続ける学校づくりに取り組む。</p>

<p>学校運営協議会 による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校経営計画に沿って、順調に教育活動が進められている。 ・SSH第4期1年目での取組を高く評価したい。 ・先生方の頑張りを、もう少し高く評価してもよい（自己評価であるため、評価が低くなっている）。 ・授業料無償化による公立高校離れが加速する可能性がある中、桃山高校の広報をより一層強化する必要があると思われる。
<p>次年度に 向けた改善の 方向性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・広報活動の強化 ・より魅力的な教育活動の展開 ・教職員が自分事として学校運営に携わる雰囲気醸成（各種プロジェクトチームの発足など）

令和7年度 学校経営計画（実施段階）

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			中間	最終	
教務部	「主体的学習者」の育成のための教育活動や授業改善の取組を支援する。	第4期SSHの実施にあたり、分掌、教科及び各種会議と連携し、SSH関連行事や学校行事等の調整を図る。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ・他分掌や教科との連携をとりながら、行事や授業等の実施を調整することができた。また、次年度に向けて実施時期や実施形態の改善点を見つけたことができた。 ・学習やその他の課題を抱える生徒については、担任、保健部、及び教科担当と連携し、各考査前に情報を全体で共有するとともに、補充等を実施することができた。 ・公開授業や教科主任会議を通じて交流し、授業改善につながる情報共有はできたものの、今後の方向性を打ち出したり、より具体的な取組の実施には至らなかった。
		学年部、保健部及び各教科と連携し、学習に際して課題を抱える生徒に対して、補充等を通してきめ細かく指導する。	B	B	
		公開授業などを通じて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善を推進し、教科を越えて成果や課題を共有する機会を設ける。	B	B	
生徒指導部	生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルでの文武両道」への仕掛け作りを行っていく。また、委員会活動や学校行事等の充実を図ることによって、桃山エージェンシーを高めることにつなげていく。	生徒会を中心に、生徒全員の創意工夫を生かした主体的な取り組みをおこない、良き伝統を継承しつつ、時代に合った新しい桃山高校の魅力を作り上げていく。また、体育的行事を通して、生涯にわたってスポーツを楽しむ能力や態度を培う。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・桃山エージェンシーを高める活動に年間を通じて注力できた。おもに学校祭に係る委員会活動や生徒自身に考えさせる取組内容に重きを置くことで、学校行事への生徒の積極的参加が例年以上に感じられる1年となった。また、事後の振り返り（アンケート等）からも満足度が向上している結果となった。 ・日々の生活指導（挨拶・マナー・対話・励まし・問題行動への指導等）を大切にし、生徒指導部が最前線で一人一人の生徒への安心・安全な学校づくり尽力した。 ・年間を通じて生徒のスマートフォン等携帯電話や学習用端末の扱い方など情報モラルの観点の指導が不十分であった。年度当初の通知文や学年オリエンテーションで教職員から講話等を充実させていく必要がある。 ・複雑化する困難課題対応型の指導（特にSNS等）についての内規の整備や最善な指導の方法など、時代に合った支援や導きができるよう他分掌とも協働し、次年度からは一層発達支持型の指導方針へ転換する時期を迎えるため、教職員の共通認識・意思統一を図る必要がある。そのために、生徒指導マニュアルについて年度当初に教職員研修として、本校生徒指導について共有する機会を設けるなどの工夫を図りたい。
		HR・部活動・生徒会の活動を充実させることで生徒の主体性を養い、一人一人のキャリア発達・社会貢献への意識を向上させる。	B	B	
		部活動への積極的参加を促し、加入率の向上を図り、文武両道を実践させる。また、生徒会と連携を図り、SNSを活用して学校内外へ桃高生の魅力を発信することで、広報活動をおこなう。	B	B	
進路指導部	生徒の意欲と桃山エージェンシーに火をつけ、生徒一人ひとりがより高みを目指す進路目標にも主体的・積極的に、諦めず粘り強くチャレンジできるように進路指導を展開する。	前年度の新しい大学入試制度の状況を踏まえ、多様な進路実現に向けて、HRの時間を活用した国公立大学総合型選抜ガイダンス、放課後及び土曜日を利用した平日・土曜学習会を実施する。学校推薦型選抜、総合型選抜などの各種ガイダンス、進路講演会、学習会などの組織的な進路指導が、進路実現を目指す生徒の意欲の向上につながったか振り返る機会を設ける。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な進路希望の実現に向けて、LHRを活用した「国公立大学総合型選抜ガイダンス」、「学校推薦型選抜・指定校ガイダンス」、「共通テスト説明会」、平日7限を利用した「学習会」等を実施することができた。 ・大学入学共通テストについては、今年度から生徒個人によるWeb出願へ変更されたが、生徒、保護者への丁寧な説明を重ね、希望者全員が円滑に出願することができた。また、学校評価アンケートの「進路指導の充実度」の結果より、各種講演会、学習会などが生徒の意欲の向上に一定効果があったと考えている。 ・模擬試験については、学年主導で事前、事後に取り組むワークシートを作成するなど、学年部と協力しながら、活用方法を模索しながら進められた。今後は、模擬試験の更なる効果的な活用方法を考え、実施していく必要がある。
		模擬試験とClassiの学習トレーニング機能との連携など、模擬試験の事後活用の方法を生徒に提案する機会を設け、生徒、教員ともに効果的な模擬試験の活用を実施する。	B	B	
教育企画推進部	「主体的学習者」の育成に向けて、「個別最適化」した学習指導等を実践するために、ICT環境を整備し、利活用を図る。	ICT機器の整備・整理を進め、教員が必要な時に必要な機器を利用できるような環境を整える。また、ClassiやTeamsを通じて授業や普段の業務で利用できるICTの活用方法を共有し、各教員の業務効率や授業の質の向上を図る。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末は、授業配信用、進路指導用など用途別にケースを変え、収納場所も明確に示すことで必要なときにすぐに利用できる状態を整えた。また、変換アダプタなど必要な機器の整備も進め、これまで以上に様々な場面で端末を活用できるようになった。一方で、Classi等を通じたICTの活用方法の共有は十分に進んだとは言えないため、今後も引き続き推進していきたい。 ・学校説明会では、要望の多かった施設見学の機会を増やし、好評だった。ただし、施設見学で一部案内スタッフの不足する場面も見られたため、次年度では改善したい。学校案内は紙面上の写真を大きくすることや、生徒インタビューの内容を充実させたり、対象生徒を増やしたりすることでより本校の魅力を伝えられる内容になった。YouTubeではshort動画を中心に新たなコンテンツを増加した。生徒会との連携は十分にできなかったため、今後の課題としたい。 ・SSH第IV期申請内容に基づき、1年生に対する事業を概ね予定通り実施することができた。また、第IV期の取組の先行実施という形で、2年生に対してもGS探究Ⅱ内での取組を中心に事業を実施することができた。また、第III期より交流を重ねてきた台南第二高級中学と姉妹校提携を結ぶことができ、これまででは少人数での取組であった交流事業がクラス単位やコース単位での取組に拡大していくことが期待される。 一方で、拡大していく取組内容に対する精選が不十分であったので、次年度以降は取組の精選・体系化をより一層推進していきたい。
	広報をより充実させ、本校の魅力・特色を発信することで、選ばれ続ける学校作りを推進する。	昨年度のアンケート等を基に、説明会や学校案内の内容などの見直しを行い、より本校の魅力を伝えることができるよう改善する。中学生・保護者の目に触れることが多いホームページ、公式YouTubeチャンネルのコンテンツを充実させる。また、生徒会と連携しながらInstagram等のSNSを使った発信も進めていく。	B	B	
	「予測不能な時代を生き抜くために必要な資質・能力『5C』および自身の強みを活かして社会に貢献しようとする姿勢・意識『桃山エージェンシー』を身に付けた、個人と社会のウェルビーイングを実現するグローバルサイエンス人材の育成」という目標を教育活動全体に落とし込み、SSH第IV期1年目の事業を全校体制で実施する。	SSH第IV期申請内容に基づいて令和7年度事業計画の取組を実施し、効果検証と成果の波及を行う。また、SSH第IV期の取組について、教職員研修等を通して教職員全体へ周知し、生徒が探究的な学びを通して自身のキャリア観を形成し、希望進路を実現させるための取組を全校体制で実施する。	B	B	

令和7年度 学校経営計画（実施段階）

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題		
			中間	最終			
保健部	生徒の多様性に適応すべく安心で安全な学校環境の整備（予防的な役割の強化）	学校不適応が心配される生徒の学校生活への適応を支援するとともに、気にかかる生徒の早期発見・早期対応に努める。そのため、ピアサポート（生徒同士で支えあう）の心得を醸成する。	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・全校生徒に向けて、ピアサポートの必要性を投げかけた。そして、クラスメイトや部活の仲間に対して、具体的な行動を促すように指導した。しかし、各集団の核となる生徒への具体的な指導には至らなかった。 ・保健委員会による文化祭の展示で探究活動を取り入れた。その活動には保健委員が主体的に取り組み成果をだした。また、保健委員会が作成した『保健だより』を全校生徒に配付することにより、全校生徒のヘルスリテラシー向上に寄与した。 ・学校環境のユニバーサルデザイン化における“視覚化”“構造化”を進めることができた。 	
		保健委員会の活動に探究的な要素を加える。その活動により、生徒自身が自分の健康について考え行動できる力（ヘルスリテラシー）を育てる。	A				A
		学校環境のユニバーサルデザイン化を進めるとともに、環境美化に努める。	B				B
図書部	本校の中核的な取組であるSSH教育活動の一環として、「5C」と「桃山エージェンシー」を身に付けたグローバルサイエンス人材の育成をサポートする。	各授業や探究活動で教職員の図書館活用を推奨したり、探究に役立つ推薦図書を示すなど、様々な仕掛けを試みる。	B	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ・授業における図書館活用は従来通りであったが、推薦図書等の発信を例えば教員のおすすめ本の紹介誌（冬萌）を電子配信としたり、今の生徒の目に付きやすい形とした。 ・積極的な図書館運営としては、11月の読書月間でミニコンサートの際にライブラーポイント（本の冊数に応じた捺印）の多い生徒から前席に座れたり、図書館で食事が出来る、図書ランチを実施したり、様々な新しい試みを実施した。 ・生徒、保護者、第三者向けに、読書月間の各種イベントや芸術鑑賞（演劇、落語）等の終了後には必ずアンケートを取って来年度の改良案を練ったり、その様子を必ずホームページに掲載し、桃校を受験しようとしている中学生ら、外部に対してアピール出来たのではないかと考えている。 	
		図書委員による自主的、積極的な図書館運営（班活動、読書月間における各種行事の立案と実践など）を行う。	A				A
		「5C」に関する図書を充実させるとともに生徒に向けて紹介・発信する。	B				A
第1学年部	桃山高校での生活を通して、主体的な学習者を育成する。帰属意識を高め、学校に軸足を置いた生徒を育成する。	手帳またはタブレットでスケジュール管理をする習慣を身につけさせる。定期考査や模擬試験に向けて学習計画を調整する方法をHRや学年集会で意識させる。	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生から高校生へと生活や学習の切り替えがスムーズにできるよう、学年集会、HRを通してアプローチした。1年間を通して、学校に軸足を置いた学校生活を送っていた。 ・各教科の具体的な学習方法を共有したり、定期考査や模試の振り返りによって、定期的に学習習慣の見直しを行った。 ・具体的に大学で何をやるのかを学部学科を調べ、同じ分野に興味を持つ生徒と共有する分野別交流会を実施した。英語で交流することでコミュニケーション能力の向上や、文理系内の知り合いを作り、2年生のクラス替えの心理的負担が軽減されることも期待している。 ・2年生では与えられることだけでなく、主体的に考え行動する力を育成することが課題である。 ・進路希望の実現に向けて、生徒一人一人と丁寧にに関わり、具体的な進路目標と確かな学力をつけさせたい。 	
		学年通信や学年集会、HRを通して、生活リズムや学習習慣など基本的な生活習慣の大切さを意識づける。挨拶や身だしなみは適宜声を掛ける。	B				B
		授業や学校行事、日々の学校生活の中で他者と関わり、自他共に認められる生徒を育成する。	B				B
第2学年部	桃山高校での生活を通して、主体的に行動できる生徒を育てる。さらに人とつながりを大切に、協働して取り組むことで共に成長し合える集団を作る。	授業、HR活動等の学習活動を通じて、生徒の「探究力」を高める活動を推進する。それにより、生徒自身が主体的に進路選択できるような指導を目指す。	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・授業、HR活動等において、生徒が自ら調べ、アウトプットする機会を継続的に設けたことで、課題や進路希望に向き合おうとする姿勢が育まれた。 ・HRや個別面談等を通して、生徒の思いを丁寧に聞き出すことにより、生徒が将来について落ち着いて考え、進路選択に主体的に関わろうとする意識の向上が見られた。 ・学校行事等において、生徒が集団の一員であることに対する自覚を促すことで、集団への帰属意識が一定高まった。 ・一方で、保護者等への連絡について、Classi等を活用した、学校での情報をタイムリーに知らせる方法を模索したい。 	
		担任が生徒たちの思いを聞き出すことを大切にすることで、生徒ひとりひとりが相談することの重要性と話を聞く姿勢の大切さを実感し、相互につながる力の成長を促す。	B				B
		学校行事、LHRを集団がさらに成長するための機会であると捉え、学年通信等を通じて他者の視点から行事を振り返ることで、集団への帰属意識を高める。	C				B
第3学年部	桃山高校での生活を通して、主体的、自律的に行動できる生徒を育てる。また望ましい社会人となるための資質、能力を伸ばすことができるよう、自らの将来を展望し、目標実現のための努力を継続できる力を育む。	ホームルームや面談などを通じて、個々の生徒の特性を把握し、個別最適化した、学習指導、生活指導、進路指導を継続的に行うことを目指す。	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週実施の学年会を通して各クラスの生徒個々の変化や情報を共有し、意見交換を行い、ホームルーム運営に役立った。 ・他分掌と連携しながら各担任が、それぞれの生徒に対して、日常的に対話の機会を作り、適切な時期に丁寧な個人面談を行うなど、効果的な生徒指導や進路指導を行うことができた。 ・各生徒の希望進路実現に向けて進路指導部と連携協力し、説明会の実施や模擬試験の分析活用、出願面談を円滑に実施することができた。また大学入学共通テストの本年度より実施のWEB出願にも、うまく対応できた。 ・入試前に普段通り登校するなどの平常心を保たせる指導に少し課題が残った。 	
		生徒たちが、進路実現までの見通しを持ち、主体的に進路選択ができるような指導を充実させる。特に関係分掌や教科担当者と連携し、進路実現に向けた課題設定を、生徒たち自らが行うような仕組みを作り、意欲的な態度で学校生活を過ごすことができるよう指導する。	B				B

令和7年度 学校経営計画（実施段階）

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題	
			中間	最終		
事務部	効果的な予算執行を実現するため、各分掌、教科等の要望を聞き取るとともに、生徒、教職員に寄り添った学校運営、教育活動の推進に寄与する。	長寿化改修工事を含め、校内の危険箇所、不具合箇所について、迅速に対応するとともに、生徒・教職員の安心・安全に向けた施設・設備の整備・充実を図る。	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・2号館の長寿化改修工事を終えることができたが、学校の要望に沿わない箇所や完成後の不具合などが見受けられた。 ・突発的な修繕等（水漏れ対応、汚水管洗浄、網戸固定など）は概ね迅速に対応することができたが、未然に防げる可能性もあった。 ・空調機新設（生物・物理実験室、小会議室、薬品庫）や照明器具LED化（理科3教室、武道場、食堂など）、アクセスポイント新設（保健室）を行い、教育環境整備に努めた。 ・各分掌や教科から物品購入や施設整備要望を受けてはいるものの、予算の関係上全てには対応しきれない。
		ICT機器を中心とした教育環境整備に努め、生徒に効果的で質の高い学びが保障できる教育環境を提供する。	B	B		
国語	国語で的確に理解し、効果的に表現する資質・能力を育成する。	ICT教材を積極的に運用しながら、生涯にわたって主体的に学び探究していく学習者の育成を行うと同時に、生徒の多様性に配慮した学習指導や、「協働的な学び」について研究・実践を重ねる。	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT教材の活用は一定定着し日常化しているが、扱いをめぐりトラブルも発生した。運用方法の明確化と相互点検の徹底を一層強化し事故防止を図る必要がある。 ・主体的な学習者育成を意識した授業構成の研究や実践を継続した。これで大丈夫という完成形が確立することはないと思われるので、多様性への配慮、協働的な学びのあり方も含め、常時改善を意識した評価のあり方の研究と合わせて一層精進していくことが肝要である。 ・新科目が一巡し、教科指導のあり方についての研究は一定進化した。今後は取り組みの総括を進めるとともに来年度のシラバスや授業計画に反映していく必要がある。 ・進路実現に資する単元・教材の研究は担当者個人レベルで深めることができた。今後教員間で一層の情報共有を進めることが課題である。
		新科目の指導のあり方について総括と研究を深めるとともに、大学入試で要求される課題（教科問題・小論文）の研究を進め、生徒の国語力育成に還元すべく、教科内で情報を共有する。	B	B		
地歴公民	授業や探究活動を通し、知的好奇心を高め、生涯にわたって「学び続ける」生徒を育成。	質の高い授業を展開し、小テストや個別指導、模試の分析と生徒へのフィードバックを通して、知識理解の定着と希望進路につながる学力の伸長を目指す。	C	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・小テストや模試の分析結果を基にした指導や個別対応により、基礎的知識の定着と学力向上が一定程度見られた。一方で、学力差への対応や進路目標に応じた支援の更なる充実が課題である。 ・ICTや史資料を活用した協働的活動により、多面的に考察する姿勢が育ちつつある。しかし、問いの設定や表現活動の質には差が見られ、思考を一層深める指導の工夫が必要である。
		ICTや史資料を積極的に活用し、「協働的な学び」を実践するとともに、現代の社会事象の背景や要因を考察する主題学習の活動を通して、思考力・表現力、「問いを立てる姿勢」の育成を図る。	B	C		
数学	学習意欲の向上を基盤にした主体的学習者の育成を目指す。グローバルサイエンス探究との相互の連携を図り、論理的思考力の獲得を通して実践問題に積極的に取り組む態度を養成する。	小テスト、定期考査、模擬試験の到達度目標を早期に提示することで、学習計画の作成を習慣化させる（チェックシートや手帳の活用）。目標に向けた取り組みの過程では、多様な生徒に応じた学習方法の提案や長所を生かす指導方法を検討する（個別最適化）。また、できるだけ多くの生徒に数学検定の受験を推奨し、習熟度の高い生徒には数学オリンピックや数学コンテストへの参加を促して、数学の楽しさや深く考える面白さに触れる機会を提供する。	B	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・定期考査範囲のチェックシートを早期に提示し、授業の中で指示・活用することにより、生徒が小テストや定期考査、模擬試験などに向けて目標設定や学習計画立案に取り組み、日常的に演習に取り組む姿勢を促した。 ・数学検定の校内団体受験を2回実施し、1回目は3年生73名が受験し、2回目は1、2年生33名の申し込みがあった。 ・数学オリンピック予選会には6名が参加した。 ・1年生自然科学科では、夏に神戸大学数理・データサイエンスセンターの第4回中学生・高校生データサイエンスコンテストに全員参加した。 ・自然科学科において、京都大学の教授2名による高大連携講座を実施した。 ・ICTの活用として、ロイロノート・Teams・Classi・エスビューア・Libry・Geogebra・grapesなどを適宜利用して深い学びや対話的な学びを実践し、視覚的效果を利用した授業実践を行った。 ・ICTやAIの授業における活用については今後も研究し、教員間で情報や教授方法を共有する必要がある。 ・数学の授業を深める工夫や効果については、概ね現段階の目標を達成した。 ・新学習指導要領による指導計画や評価については、継続して教科内で検討する必要がある。とくに、考査に拠らない評価の仕方、日常的な学習活動をどのように評価するかは早急な検討が必要である。
		深い学びにつながる教授法やデジタル教科書等の利活用について、継続的に検討する。また、ICTを用いて生徒のレポートや添削課題等を生徒間で共有し、ペアワークや探究活動を通じて数学的・論理的思考力を磨く。	B	B		
		教育課程および指導計画や評価の方法について、従来の評価と観点別評価の整合性を踏まえ、昨年度までの実践結果をもとに検証を行う。	B	B		

令和7年度 学校経営計画（実施段階）

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題		
			中間	最終			
理科	協働的な学びや自ら仮説を立てる実験の実践を通して科学的に探究する活動の充実を図り、主体的学習者の育成及び科学的思考力の向上につなげる。	思考力・判断力・表現力を育むための実験・探究学習を積極的に行う。	B	B	B	思考力・判断力・表現力の育成を目的とした実験・探究学習を計画的に実施し、生徒が自ら仮説を立てて検証・考察する学習過程を重視した。その結果、協働的に課題解決へ取り組む姿勢が育まれ、実験レポートにおいても、仮説について論理的に説明しようとする記述が見られた。また、観点別評価を意識した授業等の設計を行い、生徒アンケートを活用しながら授業改善を進めることができた。さらに、教材や授業実践の共有を通して意見交換を行い、自身の授業改善にもつなげることができた。一方で、探究する力の深まりには個人差があり、仮説の質や考察の論理性を高める指導の工夫が必要である。また、評価の妥当性や客観性の向上、実践の共有を継続的・組織的な取組へと発展させる仕組みづくりが今後の課題である。	
		観点別評価法の研究や生徒アンケートを通して、「指導と評価の一体化」の観点から授業改善を行う。	B	B			
		教材や授業を積極的に公開し、教科内外へ広く共有する。	C	B			
保健体育	体育・保健の見方・考え方を働かせて健康課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程や探究活動を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する。	具体的な知識と汎用的な知識とを関連付けて理解できるようにするとともに、科学的知識を基に技能を身に付けることでその理解を一層深める等、知識と技能を関連させて指導する。また、技能の向上に向け、ICTの有効活用を積極的におこなっていく。	B	B	B	体育においては、具体的な技能向上及び戦術・作戦・戦略についての知識を与え、グループワークや振り返りシートを活用し、技能の向上とチームワークの醸成を図った。今年度は、全学年の授業においてICTの有効活用がより積極的に行き、知識の理解とともに、技能の向上にも成果を上げることができた。 保健授業においてもICTを十分に活用する授業をさらに展開させた。自らの健康に関する課題や社会における健康問題を発見し、解決に向けた探究活動を通して思考・判断力を身に付けさせた。また発表活動を通して他者に配慮しながらも自らの健康や社会における健康問題について、主体的に考える力を身に付けさせた。 体力の向上を重視し、心身の状況に応じて自ら体力を高める方法を身に付けさせた。生涯にわたって体力の向上を図り、心身の健康を保持増進し続けるために、運動を継続的に取り組ませる資質・能力の更なる育成が今後の課題である。	
		健康課題を発見し合理的、計画的に解決することや、新たな課題の発見や探究活動につなげたりすることができるよう知識を活用、応用して思考・判断したことを、根拠を示したり他人に配慮しながら言葉や動作などで即座に表したり、図や文章及びICT機器等を活用して筋道を立てて伝えることができるよう指導する。	A	B			A
		愛好的態度及び健康・安全、公正、協力、責任、参画、共生について、汎用的な知識を関連させて指導することで、主体性を促し、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力を育成する。	B	B			B
芸術	音楽：学習指導要領の趣旨を踏まえた学習指導の徹底を図るとともに、本校生徒の実態に即した授業展開の工夫に努める。	主体的に音楽に関わり、感受する力を育成するため、表現、鑑賞のそれぞれの学習内容について、批評活動を積極的に取り入れる。	B	B	B	様々な音楽活動を展開する過程で、生徒相互の発表による批評活動を通して、主体的、協働的に学習成果を身につけることができた。タブレット端末の活用については、創作領域に取り入れることで、一定の成果を収めることができた。 「抽象」をキーワードに年間の授業を計画した。抽象化について、また抽象的な美しさについて考える中で、具体的な事象から普遍的な問題意識を抽象化したりする観点が育まれた。 もう一つの柱として美術を道具として使い身の回りの社会問題などを考える授業を組み立てている。ここ数年は「コロナ」をテーマにしていたが、今年度はカフカの変身を読んで、主人公はどんなウングェッサーに変身したのかを想像し絵に描きそれをキャラクターとして立体化させた。次年度同じテーマで行う際には、原作をどれほど深い所で理解させるかが課題である。 相互発表等の活動を積極的に設定し、表現、鑑賞の各分野で一定の成果を収めた。一人一台端末の活用については、授業記録や作品提出を行った。来年度より電子黒板等が整備され、実技指導や活動成果の共有などに生かしていきたい。	
	美術：授業と評価の一体化をふまえた授業計画を立て、その趣旨を理解した主体的な学習者の育成を図る。	課題のテーマや評価観点を具体的にかつ明確に示すと共に自分の創作活動を客観視するために生徒相互の評価活動を授業内に組み込むような授業計画をたてる。	B	B			B
	書道：書に親しむ活動を通して、感性を高め、書写能力の向上を図り、主体的な学習者の育成に向けた授業展開を行う。	基礎・基本を身につけ、「表現」、「鑑賞」の学習内容に、批評活動を積極的に取り入れた授業展開を行う。	B	B			B
英語	英語学習における「主体的学習者」を育成する。	授業、家庭学習を通して、主体的に英語力向上に取り組めるよう、ICTを効果的に活用するとともに、1年間の学習計画と効果的な学習方法を明確に示す。	B	B	B	年間の学習計画を早い段階で示しつつも、模擬試験の結果を加味しながら柔軟に修正しながら進めることができた。資料の共有などは、ICTを利用しつつも生徒の意見も取り入れながら、印刷して対応するものを分けて対応することができた。自主的に学習する習慣を形成するのに貢献したものとと思われる。 また、段階的に中間検査や週末課題を廃止したが、読解量やリスニングの演習量を減らすことなく、授業の内容を改善する取り組みを進めることができた。模擬試験の過年度比較において大きな変化がなかったことから、その取り組みを教科内で共有し、広めていきたい。 一方で、記述・論述形式の力が弱いことが模擬試験や定期検査の結果から明らかになってきており、改善策を検討する必要がある。選択肢形式の問題の解答率が良いことから、概要把握の力は中学校からの流れから大きな問題がない一方で、内容をまとめたり、意見を述べるなど論述する力が低い傾向にある。選択形式の採点の負担が軽くなっている状況下で、論述形式の採点方法について研究や実践が必要であると考えている。	
		教員による解説を簡潔にし、ペア・グループワーク、パフォーマンステスト等を通し、生徒の英語の発話量・読解量・活動量を増やす。	B	B			B
		パフォーマンス課題をさらに推進し、自己表現や学習成果のアウトプットの場として生徒が主体的に取り組む、英語を使う楽しさを感じられるようなパフォーマンス課題の仕組みをつくっていく。	B	B			B

令和7年度 学校経営計画（実施段階）

領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題		
			中間	最終			
家庭	「衣・食・住・消費・福祉・子ども・環境」など多面的な学びを実現させるとともに、キャリア教育・消費者教育・ジェンダー平等・SDGsへの理解を深める	消費者トラブル事例や契約・情報リテラシーに関する教材を活用し、実践的な判断力を育てる。	C	B	B	実践的な判断力を育てることを目標とし、動画視聴や様々なテーマを与え課題解決に必要な知識・技能を身に付けられるよう授業を工夫した。グループワーク等を通して協働的に課題解決へ取り組む姿勢が育まれた。現在様々な体験を行っているが、今後時代の変革に応じた体験実習の工夫が必要である。	
		「持続可能な衣食住」をテーマに、廃棄医療問題、地産地消、食品ロスなどの課題を扱った動画視聴や探求型授業を行う。調理実習や被服実習も取り入れる。	C				B
		乳幼児と高齢者の生活や福祉についても、ライフステージごとの心身の変化を「シニア体験」「マタニティー体験」実習により理解を深める。	A				A
情報	新学習指導要領の確実な実施により、情報と情報技術を活用する力と情報社会に参画する力を養う。教科の教育活動を通して学びの自己調整能力を養い、生徒の実践的な情報活用能力を育てる。	教育課程の改変に対応する。従来GS探究Iで培った指導や評価の実践を踏まえて、新しい科目GS情報の具体的な指導と評価のあり方や手法を確立する。	B	B	B	今年度から設定された学校設定科目「グローバルサイエンス情報」としての一定の方向性を確立できた。 現代社会の諸課題に対するICT技術の活用の可能性等について、視野を広げていくような取り組みを重視していくことが一層必要である。	
		Society5.0を見据え、社会全体に対する関心を深めるとともに、生徒一人ひとりが主体的に情報社会に関わっていく態度を育成する。	B				B
グローバルサイエンス	探究的な学びを通して、予測不能な時代を生き抜くために必要な資質・能力「5C」の育成および桃山エージェンシーの育成を図る。またSSH4期目1年目にあたり、目標や実施計画を全教職員で共有し、実施していく。	GS探究I、II、IIIを通して、3年間の探究的な学びのストーリーを生徒、教員、保護者が実感できるように、探究通信等を用いて情報発信する。また、職員会議での研修や協議・公開授業などを通して、目指す生徒像を教職員全体へ周知し、探究的な学びを通じたキャリア観の形成糧について共通認識を作る。	B	B	B	本年度は、GS探究の充実に向けて外部連携を積極的に推進し、大学・企業・地域人材等との協働の機会を拡充することができた。その結果、発表会への外部参加者数も例年より増加し、生徒が多様な視点から助言を受けることで学びを深める機会となった。また、担任が探究活動に関わる体制が進み、単なる課題研究の実施にとどまらず、「探究を通して育てたい力」について教員間で共有しながら指導を進めることができた。さらに、メンターの伴走の在り方についても研修や振り返りを通して研鑽を重ね、支援の質の向上を図った。一方で、探究に関わる教員向けマニュアルの整備や、探究通信の発信頻度の向上が今後の課題である。	
		自己と社会のウェルビーイングを目指す資質能力の育成に向け、GS探究IIを中心に、学部人材の活用や学校外での活動を充実させていく。	B				A
		SSH4期の目標達成に向け、生徒の資質・能力、姿勢・態度を評価するルーブリック・評価方法を全教職員で検討する。	B				B